

戦後の女性画家たち

—有馬さとえ・朝倉摂・毛利眞美・小林喜巳子・招瑞娟—

2024年7月1日（月）～8月3日（土）
実践女子大学香雪記念資料館 企画展示室 1・2

ありま 有馬さとえ（1893-1978）

鹿児島市の医師の父のもと三女として生まれる。本名サト。後年は「三斗枝」とも表記する。鹿児島県立第一高等女学校在学中、油絵を学ぶため退学。明治末頃、周囲の反対を受けながらも、東京に嫁いだ次姉や、母の付き添いなど、家族に支えられつつ上京をする。渋谷区恵比寿にアトリエを構えていた洋画家・岡田三郎助（1869-1939）の門を叩き、住み込みで洋画を学ぶ。1914年、8回文部省美術展覧会（文展）に出品した《静物》が初入選すると、以後、文展、帝国美術院展覧会（帝展）に入選を重ね、1926年、7回帝展出品《花壺》が女性の洋画家として初の特選を受賞。翌年から無鑑査となり、1937年に改組を経て始まった文部省美術展覧会（新文展）でも無鑑査としてこれに参加した。戦後は1946年に行われた1回日本美術展覧会（日展）に《五月の窓》（作品番号1）を出品、1954年には同展の審査員に選ばれる。1976年まで日展への出品を重ね、また、しばしば審査員も務めるなど、晩年まで洋画界において活躍を続けた。岡田のもとで洋画の基礎を学んだ有馬は、人物画や静物画を中心に穏健で写実的な作品を展開するが、晩年は筆致も大胆になり画風も自由なものへと変化をしている。また、生涯独身だったが長く姉一家と交流をし、弟子たちにも支えられながら晩年を過ごした。公爵島津忠重の長女・島津経子もそうした弟子のひとりで、《題名不詳（チャイナドレスの女性）》（作品番号2）のモデルの可能性が指摘されている。有馬の没後は、弟子で鹿島建設取締役を務めた鹿島卯女により、1979年、『有馬さとえ画集』（河北倫明監修、鹿島卯女編集、鹿島出版会）が出版され、同年10月2日から7日まで日本橋三越本店において遺作展が開かれた。（M）

【参考文献】

児島薫「有馬さとえ作《五月の窓》と《チャイナドレスの女性》について」『実践女子大学香雪記念資料館館報』17号、2020年、p.59-64。
河北倫明監修、鹿島卯女編集『有馬さとえ画集』鹿島出版会、1979年

No.1

五月の窓

1946（昭和21）年
油彩・キャンバス、額
91.0 × 117.0cm
1回日本美術展覧会

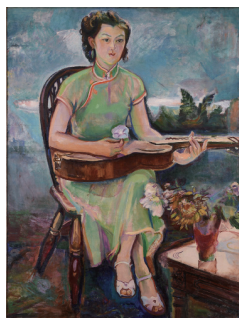


《五月の窓》

No.2

題名不詳 （チャイナドレスの女性）

1950（昭和25）年頃
油彩・キャンバス、額
130.5 × 97.3cm



《題名不詳（チャイナドレスの女性）》

謝辞

当館に貴重な作品をご寄贈下さいました方々、またご協力を賜りました関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。

松田美枝子、伊藤亜古、小林早百合、詹永年
近藤和子、寺崎百合子、相澤房子、町村悠香、堂本右美

（敬称略）

あさくらせつ 朝倉摂（1922-2014）

彫刻家朝倉文夫の長女に生まれる。妹の朝倉響子（1925-2016）は彫刻家。多数の学生が彫刻に取りくむ朝倉塾を身近に見つつ、姉妹は文夫の教育方針により家庭教師に学び、当時の女学校教育を受けずに成長した。1939年17歳で伊東深水に師事。深水らが主宰する青衿会に出品し、また1941年には4回文部省美術展覧会（新文展）に初入選し入選を続けた。その一方で1941年から、福田豊四郎、吉岡堅二らが結成した新美術人協会に参加して現代生活に根差した新しい日本画を研究した。戦後、1948年に福田豊四郎、吉岡堅二らが創造美術を結成すると、朝倉も翌年から出品し、50年の3回展には抽象的な人物表現による大作《群像》（練馬区立美術館蔵）などにより奨励賞を受賞した。この頃から従来の日本画の材料にとらわれない技法を試みていく。1951年に創造美術が新制作協会日本画部となると会員となり新制作展に発表を続ける。1953年には3回上村松園賞を受賞。また日本国際美術展、現代日本美術展にも出品した。

朝倉は労働者の姿に関心を強め、戦後復興の影で置き去りにされていく人々を描くことで社会の矛盾を問いかけた。身近な建設現場だけでなく、佐藤忠良、中谷泰らと千葉の漁村や常磐炭田に写生旅行を繰り返した。また周囲の証言によれば、貧しい農民や戦争に苦しむ人々、とりわけ母子を描いた版画家、彫刻家のケーテ・コルヴィッツに傾倒していたという。こうした点が小林喜巳子、招瑞娟と共通する。

舞台美術には戦後早くから取り組んでいたが、1970年、新制作を退会しロックフェラー財団の招待で渡米すると、帰国後は舞台美術家として活躍した。（K）

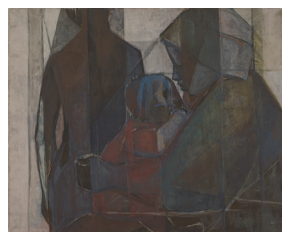
【参考文献】

児島薫「朝倉摂の初期の画業について」『実践女子大学文学部紀要』63集、2021年、p.11-32。
児島薫「朝倉摂が描いた現代社会—《働く人》、《日雇の母》から《神話の廃墟》まで」『実践女子大学香雪記念資料館館報』18号、2021年、p.38-51。
『朝倉摂の見つめた世界 絵画と舞台と絵本と』神奈川県立近代美術館、練馬区立美術館、福島県立美術館編著、青幻舎、2022年

No.3

ひやとい 日雇の母

1953（昭和28）年
紙本彩色、額
65.0 × 80.0cm
新制作春季展



《日雇の母》

No.4

部屋

1957（昭和32）年
画布彩色、額
89.5 × 149.9cm
21回新制作展



《部屋》

毛利眞美 (1926-2022)

毛利元就の子孫である毛利利喜衛とキミノの六女として広島に生まれる。女学校卒業後、絵の学習を志し、東京の女子美術専門学校西洋画科に入学するが病気のため帰郷。カトリック教会の神父たちにフランス語を学び、1950年に渡仏。到着当初はカトリック教会や信者たちが滞在を迎え入れた。キュビズムの画家アンドレ・ロートの画塾で9ヶ月ロートの絵画理論を学んだ後、イタリアで初期ルネサンス絵画などを研究し、幾何学的構成と鮮やかな色彩による具象表現に自身の表現を見いだした。1952年に帰国し、1953年、54年と資生堂ギャラリーで個展を開き注目を集めた。出品作については新聞、雑誌の展評に掲載された図しか手がかりが無いが、《自画像》(1954年)(作品番号6)は「美術展メモ」『毎日新聞』(1954年3月5日6面)欄に資生堂ギャラリーの個展の展評があり、本展出品作であることと題名が判明する。記事の著者「F」(おそらく船戸洪吉)は「背景と顔を濃黄に、髪とセーターを灰に、その二色の異常なバランスと、立体派的に分解した面を濃淡のトーンで組立っている。黄の楽天と灰の陰うつ、前進する黄と後退する灰、色の持つそのような感情と距離が交錯して、若く甘くやや主知的な女性感情が造型化されている」と述べる。異なる濃さの黄色の顔面と、やはり濃さの異なるグレーの対比のなか、現実的な顔の描写も保たれており、キュビズムとは異なる画面構成を獲得している作品である。(作品写真は『美術批評』28号、1954年、4月号、p.56にも掲載)。

制作年不詳の《題名不詳(人物)》(作品番号5)については、図の掲載が無いながら1953年の個展の批評、植村鷹千代「美しい色調 毛利眞美個展」(『朝日新聞』1953年1月13日6面)が「赤と緑と黄の淡い色調は、滞欧作らしい美しさをもっている。中でも「赤い服」「緑の服」などは好ましい小品である。この色調が日とともにうすれるバリの色でなく、この作者自身の色調として育てゆくことを期待したい」と述べているなかの「赤い服」である可能性があるのではないかと述べている。顔や額の描写からは、やや年配の女性像であると推察される。男性画家によるキュビズムの女性表現においては往々にして女性の身体を画家が一方的に解体するのに対し、毛利のこれらの作品では、女性たちはこちらをまっすぐに見返し存在感を示している。絵画と対峙して制作する画家の強い意志を感じることができるだろう。

毛利はその後画家の堂本尚郎と結婚し、1960年4月に東京画廊で個展を開くが、その後制作から遠ざかり、4度目の個展を村松画廊でおこなったのは1997年であった。2022年1月9日に95歳で死去。没後生前のインタビューを元に評伝が出版され、2024年「毛利眞美 出版記念展」が銀座、南天子画廊で開催された。(K)

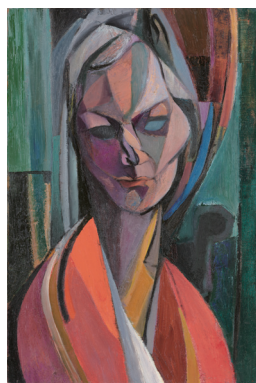
【参考文献】

高見澤たか子著、堂本右美編『ふたりの画家、ひとつの家』東京書籍、2023年

No.5 2023年度新収蔵品

題名不詳(人物)

1953(昭和28)年頃
油彩・キャンバス、額
60.7×40.8cm



《題名不詳(人物)》

No.6 2023年度新収蔵品

自画像

1954(昭和29)年
油彩・キャンバス、額
60.3×45.6cm
個展(資生堂ギャラリー)

小林喜巳子 (1929-2023)

父、謙一郎、母世直子(米子)の次女として世田谷区祖師谷に生まれる。母は水戸師範学校を出て小学校の教員をしていたが結婚を機に上京し、光明養護学校の嘱託となる。喜巳子は3歳のときの病により右手は指先以外動かすことができず、手に職をつけさせようという母の希望から女子学院で学ぶ傍ら、大久保作次郎に絵を学んだ。女子学院を卒業すると、1946年男女共学となった東京美術学校を受験。37名の女性合格し、油画科にはその内17名が入学した。小林は安井曾太郎の教室でデッサンや油彩画を学んだ。《晴日睡蓮》(作品番号7)は入学後間もない時期の作品である。《題名不詳(自画像)》(作品番号8)も卒業制作の《自画像》(1951年、東京藝術大学蔵)では安井風のたっぶりとした筆遣いを身につけていることと比較すると就学中の作品とみられる。

1951年3月に卒業すると子供達に絵を教える一方、同級生と「赤土会」を結成しタケミヤ画廊で展覧会をするなど画業を継続する。当時は労働者を描くために日雇いの女性をモデルに雇ったと回想しており、朝倉摂との共通点が見られる。また朝倉が鮎子で漁師たちを写生したように小林も千葉で貝を剥く人々を写生している。

1950年代から平和美術展、日本アンデパンダン展に出品。この頃から上野誠、三井寿、小口一朗、滝平二郎らの影響で木版制作に向かった。1955年の第8回日本アンデパンダン展で発表した《一日日本人の生命》(1954年)(作品番号12)は第五福竜丸事件を表したものである。乗組員で被爆し1954年に亡くなった久保山愛吉を家族や仲間たちが見守る構図は、町村悠香氏が指摘するとおり、ケーテ・コルヴィッツの作品《カール・リープクネヒト追悼》と共通する。ケーテ・コルヴィッツは貧しい農民の苦悩や戦争の悲しみを版画や彫刻で表現した作家であり、戦後日本で平和や労働者の権利が議論されるなかで、多くの作家がコルヴィッツに傾倒した。小林はまたフェルナン・レジェの画風にも学ぶが、川口の鋳物工場を描いたとされる《町工場》(1957年、青年美術)(作品番号10)はそのことを示す作品である。レジェは労働者を描き、1955年の平和美術展にポスターを送った。

小林は1956年頃結婚し評論家の林文雄、林の前妻の子供たちと暮らした。《Kの家族》(作品番号11)はその頃に描かれたものではないかと考える。イーゼル横でスケッチブックに向かう自身を堂々と描く構図からは画家としての自意識と、新たな家族を自分が背負おうとする意気込みが感じられる。この頃林は実践女子学園で社会科教員をしていたが、組合結成をめぐる学園側と対立し、他の2人の教員とともに解雇された。これに反対する高校生たちが結集し、長期にわたる解雇反対闘争が起こった。小林はこの事件を大型の木版画作品《私たちの先生を返して》(1964年、個人蔵、他)として表した。林はその後多摩美術大学で美術史を教えた。小林は1968年に新宿、紀伊國屋画廊で個展を開催。1982年には世田谷区の緑蔭小舎で多色刷りの木版画作品を中心に油彩・水彩による個展「団地の四季」を開催。当時住んでいた世田谷の大規模団地のコミュニティや周囲の人々の日常を平和への願いとともに表現した。2005年『グスコブドリの伝記』の木版画を出版、みずさわ画廊で個展を開催した。(K)

【参考文献】

『小林喜巳子版画集』(別冊「現代の浮世絵」付属) オフィス・ブラン・ドュー、小林喜巳子版画集編集部、編集・発行、1992年
杵渕智子記「聞き書き 母の歴史：東京都小林喜巳子さんのお話し」『新婦人しんぶん』新日本婦人の会発行、2005年6月2日～9月22日まで8月18日を除く毎週木曜日、14回連載
町村悠香「小林喜巳子と1950年代長野県南佐久郡の版画サークルーミニ企画展「彫刻刀で刻む社会と生活ー戦後版画運動の広がり」に際する調査報告」『町田市立国際版画美術館紀要』23号、2020年、p.3-34。
町村悠香「彫刻刀が刻む戦後日本 2つの民衆版画運動」町田市立国際版画美術館、2022年

No.7 2023 年度新収蔵品

晴日睡蓮

1946（昭和 21）年
油彩・キャンバス、額
32.1 × 41.0cm
《晴日睡蓮》は裏面に「晴日睡蓮」昭和廿一年八月 小林喜巳子」の書き込み

No.8 2023 年度新収蔵品

題名不詳（自画像）

20 世紀
油彩・キャンバス、額
61.2 × 50.7cm



《題名不詳（自画像）》

No.9 2023 年度新収蔵品

題名不詳（貝を剥く人）

20 世紀
油彩・キャンバス、額
80.8 × 53.7cm



《町工場》

No.11 2023 年度新収蔵品

K の家族

1950 年代後半頃
油彩・キャンバス、額
116.7 × 91.1cm

No.12 2023 年度新収蔵品

一日本人の生命

1954（昭和 29）年
木版・紙
38.5 × 47.0cm
同題の作を第 8 回アンデパンダン展に出品



《一日本人の生命》

No.13 2023 年度新収蔵品

大くら市の日

1972（昭和 47）年
木版多色刷・紙
54.0 × 74.8cm



《大くら市の日》

No.14 2023 年度新収蔵品

ぼんおどり

1972（昭和 47）年
木版多色刷・紙
53.8 × 75.2cm



《ぼんおどり》

No.15 2023 年度新収蔵品

アトリエにて

1987（昭和 62）年
木版多色刷・紙
38.2 × 54.0cm



《アトリエにて》

しょうずいけん
招瑞娟（1924-2020）

招瑞娟（ZHAO Ruijuan）は 1924 年に貿易商の父のもとに 8 人姉妹の長女として広東省に生まれ、父の仕事のために 1927 年に家族とともに来日した。1930 年に広東語で教育を行っていた神戸華僑同文学校に入学するが、1937 年日中戦争開始により教員たちが帰国し、学校は休校となった。1939 年神戸頌栄保育学校に入学し日本語で幼児教育を学んだ。1940 年、神戸華僑同文学校と神戸中華公学が合併し、神戸中華同文学校となり、1941 年、招はその附属幼稚園に就職した。この頃魯迅による木刻運動に共鳴していた李平凡が来日。神戸中華同文学校美術教師となり、神戸新集体版画協会を結成したことから、招もこれに参加する。しかし戦争が激化するなか特高警察の監視が厳しく、また空襲も増え、版画制作はできなくなった。

神戸大空襲の被害の後終戦となり、1946 年に中華同文学校が復校したため、招はその小学校の教師に就職。また GHQ の施策により東京美術学校も男女共学となったことを機に版画を学ぼうと上京し、女性の一期生として入学。夫となる福建省出身の詹永年（1926- ）もこの時入学する。2 人は外国籍のため油画科特別学生だった。版画科が無かったため、安井曾太郎教室で 2 年間デッサン、油彩画を学ぶが、中華同文学校の教員不足のため神戸に呼び戻され、教員生活の傍ら版画を制作した。詹氏によれば版木には最初から朴を用いたが、ポートを作るときに用いる厚さがあり水に濡れても曲がらないベニヤ板も用いた。紙は主に鳥の子紙を用いたという。

1954 年第五福竜丸事件を契機に、招は平和運動、原水爆反対運動、食品公害の告発など社会問題を主題とした制作に取り組む。1956 年から日本版画院に参加するが、1959 年からは版画家上野誠の勧めで日本版画協会に参加。以後ほぼ毎年出品を続けた。画集で知ったケーテ・コルヴィッツと丸木位里、（赤松）俊子夫妻の作品に触発され、虐げられた人々、被害を受けた人々を描いた。日中国交回復後、1983 年に北京で「招瑞娟版画作品展」が開かれた。夫詹氏は招の父の会社を継ぎ実業家として活躍しながらも版画家としても歩み、また招の制作を支えた。阪神淡路大震災前には画廊「線」を開いて若手画家の支援、中国版画作品の展示に役立てた。招の没後「神戸華僑女流版画家 招瑞娟遺作展」（2022 年）が神戸華僑歴史博物館で開催されている。

招瑞娟の人生は神戸の華僑社会のなかでほぼ完結していたと言えるが、町村悠香氏が明らかにしたとおり、魯迅の木刻運動とも直結する存在であり、戦後の日本での広がりの中に位置する重要な、そして数少ない女性の作家であった。（K）

【参考文献】

高橋亨監修、構成・発行詹永年『招瑞娟版画集』1984年
町村悠香『彫刻刀が刻む戦後日本 2つの民衆版画運動』町田市立国際版画美術館、2022年
町村悠香「招瑞娟の歩みと神戸華僑が紡いだ日中版画交流史-2023年度新規収蔵作品から」『町田市立国際版画美術館紀要』27号、2024年、p. 14-17。
また詹永年氏に書面で質問を送りお答えいただいた文書も参照した。なおこの文書で詹氏によれば神戸生まれとのことだが、『招瑞娟版画集』年譜、および『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第3巻』（ぎょうせい、1997年）の入学者記録では広東省と記されている。小林喜巳子、招瑞娟の活動、作品に関しては町村悠香氏より多くのご教示を得た。

No.16 2023 年度新収蔵品

石炭かつぎ

1956（昭和31）年
木版二色刷・紙
32.5 × 40.0cm
7回日本版画院展出品作
と同図か



《石炭かつぎ》

No.17 2023 年度新収蔵品

麻袋を繕う老婦

1957（昭和32）年頃
木版多色刷・紙
49.7 × 36.0cm
日本版画院春季展出品作
と同図か



《麻袋を繕う老婦》

No.19 2023 年度新収蔵品

老婦

1959（昭和34）年
木版・紙
53.4 × 37.6cm
27回日本版画協会展出品
作と同図か



《老婦》

No.22 2023 年度新収蔵品

海辺の少女

1974（昭和49）年
木版・紙
32.7 × 38.3cm
42回日本版画協会展出品
作と同図か

No.23 2023 年度新収蔵品

小憩（II）

1975（昭和50）年
木版・紙
60.0 × 41.2cm
43回日本版画協会展出品
作と同図か

No.20 2023 年度新収蔵品

とっかん 吶喊

1959（昭和34）年
木版・紙
44.7 × 31.0cm
27回日本版画協会展出品
作と同図か

No.24 2023 年度新収蔵品

シャボン玉の中の私

1976（昭和51）年
木版・紙
36.4 × 60.1cm
44回日本版画協会展出品
作と同図か

No.18 2023 年度新収蔵品

題名不詳（老婦）

1959（昭和34）年頃
墨・紙
49.0 × 35.7cm

No.21 2023 年度新収蔵品

鳩と少女（孤独）

1964（昭和39）年
木版・紙
40.4 × 28.7cm
32回日本版画協会展出品
作と同図か

No.25 2023 年度新収蔵品

がらくず 殻屑（I）

1981（昭和56）年
木版・紙
36.0 × 60.1cm
49回日本版画協会展出品
作と同図か

掲載の作品はすべて実践女子大学香雪記念資料館蔵です。

〔解説リーフレット〕

戦後の女性画家たち

一有馬さとえ・朝倉摂・毛利眞美・小林喜巳子・招瑞娟－

発行日：2024年7月1日

編集・発行：実践女子大学香雪記念資料館
〒150-8538 東京都渋谷区東 1-1-49
<https://www.jissen.ac.jp/kosetsu/>

凡例

- ・本リーフレットは実践女子大学香雪記念資料館で開催した「戦後の女性画家展」（2024年7月1日～8月3日）に際し、発行したものです。
- ・記載は作家名、作家解説に続けて、作品番号、新収蔵年度、作品名、制作年、技法・材質、形状（額のみ）、寸法、初出展等を記しました。また、展示作品の一部は画像を掲載しました。
- ・本リーフレットの編集は児島 薫（実践女子大学香雪記念資料館 館長）、三國 博子（同学芸員）が担当し、矢野 綾香（同事務職員〔学芸事務〕）、中嶋 真里（同臨時職員〔学芸補助〕）が補助しました。
- ・解説は、児島（K）、三國（M）、が執筆しました。